

影 繪

— 誘導保育の主題 —

東京市麴町區東郷幼稚園

K

S

うちの前の空地も蟲になつた。胡瓜、なす、いんげん、さうもろこしやひまわりが所せましと葉をしげらせて、増産の誇りを朝夕の風と共に吹き送る。

白い夏雲を背景に立ち竝ぶさうもろこしは、懸賞寫眞の選外佳作あたりによく出て来る風景を思はせ、いんげんのつるは、可笑しい程に高く立てた支えの竹の上までのびて、ジャックミ豆の木の話を思はせる。

この蟲の傍を、ゆうべ通つたら、スイーチョウと蟲が鳴いてゐた。星座のあの正しさ。あゝもう秋ですねえ、私は誰かに話しかけたくなりながらしばらく會はない子供等のことを思ひ出す。もう直ぐ二學期が始まる。みんな元氣でくるだらうか。色々したいこと、しなければならぬことを考へるさ、心がじーんと引き締つてくる。そうさ、誘導保育は「お月見」をさつそく始めることにしなければ、なまじも思ふ。

ゆるく月を賞でながら、歌をつくる時ではなくなつたし、幼稚園も決して現實の日本の生活に掛け離れた天國ではない。いよゝの場合相當な試験にも耐えられる強さを子供達に與へて置く必要もあるけれど、一方又「お月見」の主題で子供達に與へる保育も失ふことは出来ない。

ところで、私は未だに誘導保育云ふものに本當の自信を持つてゐない、疑問もある。これが誘導保育でございませうと申し上げる代りに、私の心覺えのノートの一部をそつとおめにかけます云ふ程度で許して頂かう。前置きばかり長つたらしいのも本論の貧しさを少しばかり胡麻かせると思つたからでもある。

お月見は舊曆八月の十五夜と同じく九月の十三夜と二度することになつてゐて、東北地方などでは、どちらを一度缺くのも片月見と稱して、いけないもの、縁起の悪いもの、ましてあつたが、幼稚園などでは一度で済ましてゐて別に

縁起は悪くないものご決めてゐる。今年は十月の五日が中秋明月に當るから二學期が始まつてゆつくりご用意が出来るご云ふわけ。まつ何から這入つて行かうかしら。

はなしあひ　九月六日頃。

「お月様はいつも丸いかしら」

「日本の國ばかりではなしにごこの國でもごんなごころでも、あのお月様は見えるのね、遠い支那で働いてゐらつしやる兵隊さんもやつぱりあのお月様を見てゐらつしやる。」

そう云ふご子供達は云ふだらう。

「まあない」。

「三ヶ月様もあるね」。

「日本が夜の時はアメリカはひるだからお月様見えななんだよ」なんて、あの子が云ふかも知れない。

「今夜は、きつごまるかつたご子供等は云ふだらう、見なかつう。忘れないで」ご私は云ふ。翌日、お月様を見たかごうか聞く、きつごまるかつたご子供等は云ふだらう、見なかつた子も見た様な氣になつて云ふかも知れない。

「では、まんまるくお月様を書いて見ませう、」お月様の色もぬつて帳面に貼るごにする。仲々上手な丸は一度では出来にくいから古い印刷した紙でも白い裏のものを利用して幾度でも丸をかき直し切り直しさせて見様。ごうして

も丸く畫けない子には丸いものを探し出させて型をまらせてもいゝ。糊のびんや蓋、のり入れのお皿なご探し出すだらうから。「さあ、このお月様が毎晩毎晩小さくなつて、見えなくなつてしまふ。そして又この様になつたらお月見をしませう。お野菜をこしらへたり、お園子をこしらへたり色々お仕事があるのね。Aちゃんは粘土で丸くするのごても上手だつたし、Bちゃんはお野菜のぬりゑがうまかつたし、新聞粘土で、又お野菜をこしらへて色を塗りませうか」ご云へば子供等は仕事への希望に充ちた喜びを現すに違ひない。

そして、私は、時々忘れない様に氣をつけて(お月様のこごばかり考へてゐられない先生はうつつかりするご幾日も忘れて過してしまふごがあるかも知れないから)毎夜のお月様のあり様を、なるべく子供等がそれごなしにでも觀察出来る様に助力する。そうしながら、その間に色々お月様に關しての題材を保育の中でやつて行く。

壁の一面に、空色に塗つた紙をなるべく大きく貼る(ポスターか何かの裏を使つて)新月から満月にだんご大きく形をかへて月を貼つて行く。その下に秋草を簡単に貼るごで共同製作をし様。實物を觀察させながらしたい。子供等の帳面(前にお月様を貼つたごころ)にも秋草の塗りゑごもさせ様。年長組だつたら、帳面に月を貼る時一枚前に白

い紙をまつて置いて、それに窓を切り込み次頁に貼つた月を戸を明けてのぞける様になさする。窓の下に秋草を、次頁の月の下に兎を印刷してぬりゑさせるなり畫かせるなりする。

新聞粘土のお野菜、これはごちらでもなさる通り、適當なる根氣ミたんねんさの必要。

幼稚園の鳥の大根やお芋やおまめを十五夜の日にかざられたらごんなによいだらう。私の處では、お芋やおまめは困しいから、せめて二十日大根でも育てたのを上げることにして。おだんご、後で利用するこまが少いもの故粘土でこしらへて白く塗る。かざる時は、十五づゝの單位にしていくつにも分けて置く。「十五夜だから十五上げる」云へば皆のこしらへたのを山に積むよりも何か數的にはつきりしたものを與へる様な氣がする、これは單なる私のひきりよがりに過ぎないが。

かげゑ なご

いつが螢の頃かげゑをした。映畫をする様に暗くした部屋に入形芝居の舞臺をしつらへ螢さりのミところをして見た。實物の螢がピカリ／＼舞臺の上で光る。切り紙の子供が笹や箒を持つて出る。ホーホー螢こいの歌を歌つては螢籠を動かす。子供らの會話少し、それだけだけれき仲々に印象的な劇的雰囲気をかもし出したミ、子供らはさて置き

こちらがいゝ氣になつたりしたのだつたが、その時ビートコ／＼豆の木よミ云ふのもかげゑでやつた。かげゑはよい。ひるま、まつくらな部屋に子供を閉じ込めるこまは映畫の時と同じく私は嫌なのだけれき、かげゑはたくさんのイマジネーションの世界を、持つてゐてよい。これで、十五夜の晩をやつて見る。人形芝居の舞臺に白い模造紙を貼る。光源はなるべくまぎめて繪型のまうしろからさす様に、月は懐中電燈を近くからあてればはつきりするし、遠くからあてるミ大きな月の影がうつる。この丸い月のかげを大きくうつし出してその中で黒い紙の繪型を動せばなか／＼に興は深く嬉しい。これにきれいなレコードをかけやう。兎の手に杆を持たせて動かす造作はよく手技でやる通りにしお分りにならない方は及川先生にお聞きになること。

お月様を小さくして、下に子供の影をうつしお月様の歌をうたはせ様、きつミ子供達は聲を合せてお月様のうたを歌ふだらう。

何かミてもよいお月様のうたを、きなたか知つてゐらつしやいませんの？、

兵隊さんを此處に出して、自然に、いや味なく、そして眞實に、戦ひの野に月を見る勇士の片鱗を幼いものに與へる工夫は無いだらうか。

お月様と兎の物語り、

月の井戸の話

お月様の籠のお話、あれも年少組の子供は喜んで喜んで聞かす。

アンデルセンの月の物語りはこの子供等には一寸奥へにくい。我國の神話にお月様に關するものがあるだらうか。

月明の夜の重慶爆撃行も私は忘れられないが。

與ふるお話も数多いがこれらの「おはなし」から子供らは

又何か見出すだらう。月ばかりではなしに星座のあの美しさ

正しさも知つて行くだらう。兎がゐると思つてゐる子供

もあるかも知れないが、月と兎との關連なき科學的に解釋

したら大した意味も無いのだらうけれど、幼稚園の庭の兎

への關心やしたしみがふえるのだつたらよいこと。」さあ皆

さんで兎になつて、お月様が出たらよろこんでおざりませ

う子供達は兎の耳を一生懸命こしらへる。畫用紙や古葉書

やらで兎の耳を畫いて切つて、頭の回りに合せた紙にしつ

かりと貼りつけて頭にかぶる。ピアノに合せてさんだりは

ねたり、競争したり。力いっぱいさせたい。

月と云ふ主題はさかく文學的方面への發展は豊富にあり

ながら生活的な生産的な面への動きかけが少いのは物足り

ない。月に關した童話にしろ歌にしろ、それでよいのかし

ら。

只書き並べた。間口をひろく、發展して行く誘導保育の

過程これが一番大切なのに——を書き記す事もしないのは

相濟まないしお恥しいのだがこれらを適當に保育日程の中

にあみ込んで進める中に又思ひがけないよい問題をひろつ

たり、よい發展がなされたりするだらうとあてこんでゐる。

ものへの關心、したしみから、ものを見きはめ様とする

科學の心も生れ、ものゝ美しくさ、よき、にぎけ込む藝術

への心も育つて行くことであらうから。

あの男の子達が大きくなつた時に、月を壁障の中から見

る様なことはもう無いだらう。

子供等が大人になり、世の中の爲に力をつくすよい生活

をする時に、幼い頃のある時、幼稚園の生活の一頁に於て、

月のことについて語り、歌ひ、製作した興味や努力や關心

が何かの糧になつたならば、いや、なるに違ひない、ミ私

は思ひつゝ心覺えのノートを閉じよう。

昭和十六—八月